

（急がなきゃ遅れちゃう…！）

腕時計に視線を落として時間を確かめてから、すっかり暗くなった街を走り抜ける。

今日は週に三日入っている副業バイトの日だ。だから定時で仕事をあがるつもりだったのに、定時の一時間前に急に仕事を増やされて、思っていたよりも遅くなってしまった。

ギリギリ間に合いはしそうだけれど、走らないと遅刻しちゃうかもしれない…！

信号待ちで立ち止まる時間も惜しいくらいに急いでいると、突然後ろから女性の「キャー！」という黄色い声が聞こえた。

「来栖隼人（くるす・はやと）様だー！ やっぱ大画面で見てもめっちゃめちゃカッコいいー！」

「ねー！ 一回でいいから抱いてくれないかなあ」

ぎよっとするような言葉と、彼女たちから発せられたその名前に、思わず焦る気持ちを忘れて振り返る。

彼女たちの視線を辿って見れば、ビルの大きなモニターに映った人物——来栖隼人が映っていた。会社のイベントなのか、にこやかにインタビューを受ける映像が流されている。

（隼人くん……）

ぼんやりとその優しい笑顔を見ながら、きゅっと胸が締め付けられる感覚を覚えた。

来栖隼人は様々な事業を行っている来栖グループの御曹司で、その端正な容姿から自身が広告塔のような役割も果たしている。

そして、その隼人くとわたしは小さな頃からの知り合いだった。シングルマザーだった母が来栖家の家政婦をしていたためその縁で知り合い、彼の周りにはあまりいないタイプだったからか、二歳年上だった隼人くんはなぜかわたしによく構ってくれた。違う学校のときでもなぜか下校時に校門で待っていたり、バイトを始めようとすれば来栖グループのお店のバイトを紹介されたり……とにかく、あまりにも構ってくれるから、学生のころは好意があるんじゃないかと勘違いしそうになるほどだった。

けれどわたしが大学生のころ、シングルマザーの母が病気で倒れてしまったことがきっかけで、わたしは隼人くんとそれとなく距離を取り始めた。

幸い母は手術をして無事に回復したけれど、手術費の借金を背負うことになってしまったわたしは大学を中退して働き始めた。

そしてちょうどそのころからどんどん仕事が多くなった隼人くんを見て、わたしは思い出してしまったのだ。隼人くんとわたしは、まったく別の世界の人間なのだ、と。

優しい彼は『気が弱くて可哀想』に見えるわたしが放っておけなかったただけなのだ。これ以上そばにいて、惨めに勘違いし続けるのがこわかった。

隼人くんは忙しそうなかでもこまめに連絡をくれたり会おうとしてくれるので、距離を取るのは大変だった。だけど忙しいフリをして連絡を返す時間を遅らせたり、顔を合わせないように気をつけたり、極め付きに引越しをすることで、なんとか距離を取ることに成功した。

（来栖グループの御曹司な上かつこよくてスポーツも勉強もなんでもできる隼人くんとかがつて、わたしはあんまり取り柄もないし……借金だつてあるし……会社員のお給料だけじゃ足りなくて副業のバイトもしてるし……）

そこまで考えてはっとする。今はバイトに向かつている途中なのだ。

信号が青になったことを確認すると、止まっていた足を動かして、急いでバイト先へと走っていった。



「桃花（ももか）ちゃん。次これお願いね」

「はいっ」

カーテンで仕切られた部屋から顔を覗かせた女性が、ウインク付きで注文の書かれた紙を差し出した。ちらりと見える肩からは、レースの肩紐が見える。わたしは彼女が手渡す紙を受け取ってバーテンダーのところに持っていく、作ってもらったお酒を届けるのが仕事だ。

わたしのバイト先は、会員制高級クラブ。ここでは接客を担当するキャストの女性はベビードールを着用するのが決まりらしい。数ヶ月前、副業を探していたわたしに、割りがいいからと友達が紹介してくれたバイト先だ。とは言っても、わたしは接客ではなく裏方……主にウェイター業務をおこなっている。

わたしはまだそういう経験もなかったから、ベビードールで接客をする会員制クラブなんていかがわしい雰囲気にも最初は抵抗があつたけれど、裏方でいいという支配人の言葉にここで働くことを決めた。もちろん服は黒スーツ。数ヶ月経った今は、ようやく慣れてきたところだ。

「桃花ちゃん、ちよっと……」

お酒を運び終えたわたしの耳に、支配人の声が届く。そちらを見ると、手でちよいちよいとこちらを呼ぶ仕草をしていた。

「なんですか？」

首を傾げて支配人のところへ行けば、彼は申し訳なさそうな顔をしながら

「あのね……」と口を開いた。

「VIPのお客様で、桃花ちゃんを指名したいって人がいるんだけど……」

「えっ」

（指名？ わたしを？）

ぎょっと目を見開いたわたしに、支配人が慌てて続ける。

「あ、もちろんいやだったら断ってくれていいんだよ。ただ、VIPのお客様の指名だから聞かないわけにはいなくて……もし桃花ちゃんがいやじゃなかったら、どうかな？」

申し訳なさそうではあるけれど、できれば行ってほしい。そんな気持ちで支配人から垣間見えて、わたしは気がついたら頷いていた。

そして、そこからは早かった。頷いたわたしに安堵した様子の支配人から

「それじゃこれに着替えてVIPルームに行つてね！」と袋に入ったベビードールとショーツを渡されて、あまりよくわからないまま更衣室に押し込められる。

渡されたベビードールは全体が黒いレース生地できていて、胸元に大きなリボンがついていた。それとお揃いのショーツはかろうじて陰部を隠すくらいにしか布面積がなくて恥ずかしいけれど、ベビードールがおしりを隠すくらいの長さだったのが救いだ。

急いで着替えて更衣室を出ると黒服に案内され、瞬く間にわたしはVIPルームの前に立っていた。

(どうしよう……いつもカーテンで仕切られていてよく見えないから、キャストのお仕事はまだよくわかってないのに……)

ちらりとドアの横に立つ黒服に視線を向けたけれど、「どうぞ」と中に入ることを促されるだけだった。

これで着方が合っているのかよくわからないベビードールは、着ているとスースーと全身が冷えるようで心許ない。レースの布地が薄いのもあるだろうけれど、肩紐が見えてしまうからとブラを脱いだことも大きいかもしれない。

(VIPってどんな人だろう……怖いけど、支配人さんは『優しい人だから大丈夫』って言うてくれてたし……そもそももう引き返せない空気だし……ええい、行っちゃえ！)

ぎゅっと目を強く瞑ると、ノックをしてから中に入った。中は薄暗い上に黒いレースのカーテンで仕切られていて、どんな人がいるのかはすぐには見えない。

「し、失礼します…！」

店内BGMに負けない音量でそう言ってから、カーテンを開けて中に入る。お客様の顔が見える前に頭を下げると、勢いに任せて口にした。

「あの、ご指名、ありがとうございます…！」

緊張しながら言ったら、ふ…っと小さな笑い声が聞こえた。若い男性の声だ。いや、それよりも……。

（この声って……いやでも、そんなはず……）

聞き覚えのある甘い声が、もう一度、わたしの頭に降りかかる。

「顔を上げて、桃花」

その言葉に導かれるように顔を上げると、少し柔らかい雰囲気、整った目鼻立ちの男性——隼人くんがいた。

「は、やと……くん……」

VIPのお客様が彼だったことにびっくりして目を瞬かせる。

最後に会ったのが大学を中退して少し経ったころだったから、それは数年ぶりの再会だった。

もともとかつこよかった彼は、より洗練された雰囲気を身に纏ってキラキラして見えた。シワひとつないスーツは手足の長い彼によく似合っていて、露出度の高い自分との差にかあつと頬が熱くなる。身を縮まらせるように腕を前にやって、顔を俯かせた。

「ひさしぶりに会えて嬉しいよ、桃花。座ったら？」

けれど隼人くんは、なんでもないことのように微笑んでそう言った。少しの間迷ったけれど、おずおずと革張りのソファーに座る彼の隣に腰掛ける。

「そっちじゃないよ。座るのはこっち」

「え……？」

隼人くんの言葉に首を傾げて彼を見ると、彼は自分の膝の上をトントンと軽く叩いていた。一瞬意味がわからなかったけれど、理解した瞬間また顔が熱くなって、「え、な、なんで……」と狼狽えた声が漏れる。

「キャストはここに座るのが決まりでしょ？ 知らなかったの？」

（そんなの知らない……！）

パニックのまま隼人くんの顔と膝を交互に見ていたけれど、隼人くんが「ほら、はやく」と急かしたことで、恐る恐る隼人くんの膝の上に腰掛ける。隼人くんに背を向けるようにして遠慮がちに座ったら、隼人くんからまた小さな笑い声が漏れたのが聞こえた。

「これはこれでいいんだけど……今日はこっち向きで座ろっか」

「きゃ……っ!？」

後ろから腰に手を回されたと思ったら、そのまま抱きかかえるようにしてくると回転させられた。正面に隼人くんの顔が見えて、体がまた熱くなる。

「あ、あの………恥ずかしい……」

こんな格好で、隼人くんの膝の上に跨って、こんなに近い距離で。

視線を逸らしながらちよつとでも距離を取ろうと隼人くんの肩あたりに手を置いたけれど、隼人くんの片手がしっかりとわたしの腰に回されていて、あまり距離を取ることではできなかった。それにさらに恥ずかしさが募っていると、隼人くんの長い指が優しく頬に触れた。驚いて「ひ……っ」と小さな悲鳴のような声が漏れる。

「でもここはこういう店だよ？」

「わ、わたし、裏方だから……知らなくて……」

「ふうん……。でも桃花はかわいいから、俺以外にもこうやって指名するやつがいるかもしれないね」

「そ、そんなわけない……っ」

隼人くんの指が頬を撫でて、そのまま耳に触れた。耳の形をなぞるように触れるその手つきが、くすぐったいような落ち着かないような感覚で、ぎゅっと強く目を瞑る。

「そんなわけない、か……。俺がいつも追い払ってたのに、知らないんだもん
な……」

「……………え……………？」

小さな声で呟かれた隼人くんの声は店内BGMにかき消されて聞こえなくて、首を傾げて聞き返す。けれどそれは「ううん。桃花は知らなくていいんだよ」というよくわからない言葉で誤魔化されてしまった。

「……あの……隼人くんは、なんで……………？」

沈黙が訪れることがこわくて、視線を逸らしながら聞いた。隼人くんの手は変わらず、わたしの耳や頬を撫でている。

「仕事の付き合いでたまに連れて来られるんだ。この店が好きな人がいてさ。俺はあんまり興味ないから、いつもただ話して終わりなんだけど」

「付き合い……、ひゃ……っ!？」

わたしが繰り返すようにそう言うと、隼人くんの手が下に降りてきた。頬を伝って、ゆっくりと、首筋を撫でる。

「でも驚いたな。その人から見せられた店の集合写真に、桃花が写ってたんだから。やっと見つけたと思ったら……俺の連絡無視して、こんなところでお小遣い稼ぎ？」

「む、無視してたわけじゃ……んっ」

言い返そうとしたら隼人くんの唇が剥き出しの首筋にちゅう♡ と吸いついたから、自分では聞いたことのない高い声が出てしまう。それに恥ずかしくなつて口元を隠すと、隼人くんの目と目が合った。いつもの優しい穏やかな目とは違い、少し怒っているような目つきに、びくりと肩が震える。

「桃花、この仕事はやめなよ。向いてないだろ」

「で、でも……………」

せっかく仕事にも慣れてきたのだ。なにより、ほかのバイトじゃこのようには稼げない。

そう思っただけでいい、隼人くんからハア……というため息の音が聞こえた。それに泣きそうになっていると、先ほどまで首筋を撫でていた隼人くんの手がつつ……と降りてきて、そのまま、

「あ……♡」

ベビードールの上から、胸の先端をきゅつと摘んだ。

「ここはこういう店だって言ってるんだよ」

「ん…………あ……♡ まって…………やめ、はやとく…………あっ♡ やあ……♡」

「やめないよ？ でも桃花がこの店を辞めるなら、俺もやめてあげる」

指で押し潰したり指の間に挟んだり、ベビードールの上からの確に乳首を刺激されて、変な声が出てしまう。それと同時に首筋や肩や胸元にまで隼人くんの唇がキスを落とすから、くすぐったいようなむずむずするような感覚が襲っ

てきて身を振った。力が抜けた腕で弱々しく隼人くんの肩を押すけれど、しっかりと腰を抱かれていますとびくもしない。

「ていうか桃花、もしかして……」

隼人くんはなにかに気がついたようにそう言うと、胸元のリボンに手をかけた。それに嫌な予感がして「待って……っ」と止めようとしたけれど、そんな声も虚しくリボンが解かれて、ぷるんっ♡とおっぱいが晒け出されてしまふ。

「やっぱり、なにもつけてない」

「あっ♡」

晒け出された乳首に、今度は直接隼人くんの指が触れた。まるで咎めるみたいに乳首をきゅっ♡と摘まれて、先ほどよりも甘い声が漏れてしまう。

「こういう店ではヌーブラとか着けるんじゃないの？ 誰が指名したかもわからないのにこんなエロい格好で出てきて……もしかして、こういうことされるの、期待してた？」

「んっ、う……♡ ちがっ……あ……し、ら……なくてえ……♡ あ、だめ……はや、と、く……んっ♡」

爪の先で乳首をカリカリ♡ と引つかかれる度に体がビクついて、はっ、はっ、と浅い呼吸が口から漏れた。腰に回っていた手は、いつの間にかベビードールの下のおしりを揉みしだくように撫で回していて、お腹の下の方に熱が集まるのを感じる。

「なにがダメなの？ 裏方って言っても指名されたらこんな格好で出てきちゃうんでしょ？ だめだめ言ってるのに、ちよっとカリカリしただけでこんなに乳首勃たせて、もっと触ってってしてるくせに」

「ちがぁ……うう……♡ あ……ん……っ♡ こんな、しらな……あ♡」

「うん？ 桃花はこういう店だって知らなかったんだもんね？ じゃあどういふことをする店なのか、ちゃんと体で覚えようね」

「ひ……っ♡」

隼人くんはそう言うのと、それまでちゅっ♡　ちゅっ♡　と肌に吸いつけていた唇を離して、すっかり固くなった乳首に、れろ…♡　と舌を這わせた。引つかれるのとは違う、甘い刺激に頭がびりびりする。

「んう……あ、それ、だめ…っ♡　はあ……んっ…♡」

カリカリ♡　くにくに♡

れろれろれろ♡　ぢゅるるるるっ♡

片方の乳首は爪で引っかかれたり摘まれたり、もう片方の乳首は舌で舐められたり吸われたり、それぞれ違う刺激を与えられて、目の前にばちばちと火花が散っているようだった。気持ちよさに声が漏れ出てしまうことが恥ずかしくて手を口元に持ってきて抑えようとする、それに気がついた隼人くんがおりを撫でていた手で腕ごと抱きかかえるようにして拘束したからそれは叶わなかった。

「あ、あ……♡　だめ、だめ……んっ♡　うっ…あ♡　こえ……そとに、きこえちゃ……は、ん…♡」

「大丈夫……だよ……ん、こういうことしていい店だから……聞こえないように、なってる……桃花みたいに、えちな声出しても……大丈夫だね……」

隼人くんの言葉に恥ずかしくなって、思わず彼の方を見てしまう。舐められた乳首がてらてらといやらしく光っていて、カリカリと引っかかれた乳首がもっともつとというように勃起上がっていて、それを見ると体中の熱が上がりていくのを感じた。じんじんと下腹部が疼いていて、それに合わせるように腰が動いてしまう。

「っ……も、だめえ……んっ♡ もう……おみせ、のこと、あ……♡ わか、た……からあ……♡」

「誰が……店のこと、わかったって……？ ん……さつきから、誘ってるみたいに腰動いてるけど……そんなんじや、ここも触って……言ってるようなもんでしょ」

「あぁっ♡」

乳首を弄っていた隼人くんの指が、そこからゆっくり下に降りていって、足の付け根の中心——クリトリスにあてがわれる。ずっと乳首を弄られていたせ

いか期待するようにぷっくりと勃起上がったそれは、ショーツの上からでもどこにあるのかすぐにわかるくらいだった。

「こんなに勃起させて、腰へこへこさせて、本当、俺じゃなかったらどうするつもりだったの？ 桃花がそんなにえっちだったなんて、知らなかったよ」

「ち、が……あっ♡ んう…待っ……かりかり、しないでえ……♡ あ……っ♡♡♡」

「そんな発情した顔で否定してもぜんぜん説得力ないね？ クリ虐められるのが好きな桃花には、俺がいっぱいかりかりしてあげる。指名したのが俺でよかったね、桃花」

かりかりかり♡

勃起したクリトリスをショーツの上から爪で甘く引っかかれて、頭がびりびりと痺れるようだった。熱を持った目でこちらを見る隼人くんの顔が余計に体を熱くさせて、快感がどんどん昇っていくのを感じる。

「ほら、俺以外にこんなことされたくないでしょ？ すぐ気持ちよくなっちゃう桃花には向いてないから、この仕事はやめようね」

「あ、あ♡ やめ、やめる……からあ♡♡ あ、だめ、も……いっちゃ……あ♡♡ んう……♡♡♡♡」

ビクンツ♡
ビクビクビクツ♡

大きく体が跳ねたと思ったら、とろお……♡とおまんこから愛液が漏れ出る感覚がした。今度こそ体に力が入らなくなつて隼人くんの体にもたれかかりながら、はーっ、はーっ、と肩で息をする。すると隼人くんの手が抱きしめるようにわたしの背中に回されたから、はっとして隼人くんに抱きしめられながらもなんとか顔を上げた。

「つあ……ごめ、ごめんなさい……わたし……汚しちゃったかも……つ」

焦ってそう伝えたけれど、隼人くんは首を横に振るだけだった。背中に回された腕もそのままに、わたしの首筋に顔を埋めるようにしてすーっと息を吸い込むから、なんだかちよつとくすぐったい。それに、においを嗅がれているように居心地が悪かった。

ドキドキする心臓を押さえながらそのまま待っていると、やがて隼人くんがその体勢のまま口を開いた。

「桃花、ほんとかわいい……」

隼人くんの口からうっとりとはかれた言葉を聞くと、胸の奥がきゅうつと締め付けられる感覚がした。だんだんと落ち着いてきた体の熱が再び戻ってきたような感じが余計に恥ずかしくて、ぎゅつと強く目を瞑る。

「もうちょつと、このままこうしててもいい？」

「う、うん……」

頷けば、隼人くんはわたしを抱きしめる腕の力を少し強める。今日はあともう少しでお店の営業時間が終わりだった。

（勘違いしちゃだめだ……隼人くんとわたしは別の世界の人なんだから……でも、ちょつとだけ……）

迷ったけれど、控えめに隼人くんの背に手を置いて、少しだけこちらからも抱きつくような姿勢になる。すると隼人くんがまたわたしの首筋に顔を埋めて、ちゅうつとそこに唇を押し当てた。その仕草がなんだか切なく感じられて、再び胸の奥がきゅんつと締め付けられる。結局その日、退店準備までずつと、一言も話さずにそうしてくつついたままだった。



「辞めるって言ってなかった？」

数日後、わたしは再びベビードール姿でVIPルームのソファに座る隼人くんの前に立っていた。一見いつも通り優しい笑顔の隼人くんなのに、目の奥が笑ってないように見えるのは、わたしの気のせいではないかもしれない。

「あ、あの、辞めるって言ったんだけど……せめてあと一ヶ月は……辞めないでほしいって言われて……その、だから……」

先日「辞めたい」と告げたときの、困ったような支配人の顔を思い出す。

しどろもどろに続けるわたしを見ると、隼人くんは少しの間考えするように黙ったあと、トントンと自分の膝を叩いた。

「……………わかった。おいで、桃花」

「え……………」

「このことは俺に任せて。でも今はキャストなんでしょ？　なら、『お仕事』しないと」

その『お仕事』という言葉でこの前のことが思い出されて、カッと体が熱くなった。どうしようかともじもじしたけれど、隼くんが促すように「桃花」と名前を呼んだから、仕方なく彼の膝の上に跨る。

「今日はちゃんとこっち向きで座れてえらいね」

「……う……」

この前とは違い、最初から隼くんと同じ向き合うように彼の膝の上に座ったら、褒めるように頭をよしよしと撫でられる。この体勢も近い距離に彼がいることも、なによりこの前のことを思い出してしまうことも、すべてが恥ずかしさを助長させて、体に熱が集まっていた。

「顔真っ赤でかわい……この前のこと、思い出しちゃった？」

「ち、ちが……っ！　この体勢、恥ずかしくて……」

苦し紛れの言い訳を口にする、隼人くんは「そっか」と言いながらも少し笑っていた。見透かされているようなそれに余計に居た堪れなくなって視線を逸らしていると、隼人くんが口を開く。

「桃花から、俺にサービスはないの？」

「え……？」

「指名してるんだから、もう少しサービスしてほしいな」

「で、でも………なに、したら………」

たしかに隼人くんはお客様として来ているんだから、それもそうかもしれない。だけど、なんでも持つてる隼人くんに対して、わたしにできることなんてあるだろうか。

おずおずと尋ねたわたしを見ると、隼人くんは笑顔で言った。

「じゃあ……桃花からキスして？」

「えっ……」

（そ、そんなことでもいいの？）

拍子抜けだったのが顔に出ていたのか、隼人くんは「なに、その顔？」と少し笑った。

「もっとエッチなお願いされと思った？」

「ち、ちがう……！」

反射的に顔が赤くなって、ぶんぶんと首を横に振って否定する。それでも隼人くんが笑っているから少しムツとすると、「ごめんごめん」と返された。

「でもほっぺじゃないよ、口にするんだよ」

「わ、わかってる……っ」

小さい子に言い聞かせるような言葉遣いに早口で返すと、隼人くんは小さく笑ってから「じゃあ、はい」と言ってそれきり口を閉じた。

「……………目、閉じて……………」

「ん？ うん、閉じるね」

（絶対からかってる……！）

おもしろがってる様子の隼人くんが目を閉じたことを確認すると、その唇に自分の唇を近づける。キス……は、まだ、したことないけれど。でも唇と唇をくつつけるだけなんだから、それくらいできるはず……！

店内BGMはうるさいはずなのに、隼人くんに聞こえてしまいそうなくらいにドキドキと胸が高鳴っている気がした。端正な隼人くんの顔が近くなればなるほど胸の音は勢いを増していくようで、耐えきれずに目を強く瞑る。呼吸の仕方を忘れたみたいにくい。

（あとちょっとで、くつつく……）

そう思っていたら、ふに、と唇の先にやわらかな感触が押し当たって、それを感じた瞬間に勢いよく離れた。

「し、した……！！」

顔から火が出そうなくらいに熱くなって、店内の空調は変わっていないはずなのに、瞬間ぶわっと汗が滲んだ感覚がした。

わたしの言葉を聞いた隼人くんが閉じていた目を開くと、その目は一瞬驚いたように丸まったけれど、すぐにおかしそうに笑い声を漏らす。

「ふ、くく……っ。もう終わり？」

「ち、ちゃんとしたもん……！」

「ほんとかわいい、桃花。前もつとすごいことしたのに？」

隼人くんのその言葉に、体の熱がますます上がる。

「だ、だってキスのやり方わかんないもん……！ 前も、あんなこと、初めてだったから……っ」

恥ずかしさでおかしくなりそうになりつつそう言っていると、隼人くんは少しだけ驚いた顔をする。そしてすぐに優しく目を細めた。その瞳が本当に優しく、愛おしいものでも見るような目をしていたから、わたしはまた、勘違いしてしまいそうになる。

「じゃあ、俺が教えてあげる」

「え……」

「キスのやり方」

そんな優しい顔のまま隼人くんがそう言うから、続けて「目、閉じて？」という言葉に拒否もできなくて、わたしは戸惑いながらも気がついたら目を閉じていた。

心臓がまたうるさく音を奏で始めるのを感じていると、唇にやわらかな感触が広がる。先ほどわたしがしたときよりも心地よく感じるそれにきゅうつと胸が締め付けられる感覚を感じていると、ちゅう♡と唇が甘く吸われたことで、驚いて少しだけ唇が開いた。そこからゆっくりと隼人くんの舌が入ってきて、驚いているうちにわたしの舌を絡め取られてしまう。

「んっ……ふ……」

驚いて離れそうになったけれど、後頭部に隼人くんの手があることで離れない。

やわらかな舌がわたしの舌に絡みつくように撫で回して、角度を変えながら何度も深く舌を絡める。次第に唾液が溢れてきて、ぬるぬる♡と絡みつくそれは苦しさよりも気持ちよさが上回って来た。

それと同時に背中にも回されていた隼人くんの手が、いつの間にか腰からおしりのラインをなぞるように、つつ……♡と這わされる。気持ちよさにくらくらしてきたところに長い指で腰からおしりを撫でられると、ビクッ♡と体が震えて、お腹の下に熱が集まっていた。

「ん……♡」

うずうずする下半身をどうにかしたくて、腰が揺れてしまう。自分でも気がつかないうちに隼人くんの首に腕を回していて、まるでおっぱいを押しつけるような体勢で体を預けてしまっていた。

隼人くんは腰を撫でていた指を胸元に持ってくると、ベビードールの胸元にあるリボンを解いてわたしのおっぱいを晒け出した。

（今日はちゃんとヌーブラもつけてきたのに……♡ どうしよう…あ、ヌーブラも取られちゃった……♡）

胸の突起も露になってしまった状態で、隼人くんの指がおっぱいに触れる。つんっ♡と指先で乳首を触れられたことで、もうそこがしっかりと固くなっているのがわかってしまった。

（どうしよう、恥ずかしい……♡ 隼人くんにあんな気持ちになってると、バレちゃってる……♡）

舌で咥内を犯されるのは続いていて、くちゅ♡ と唾液の交わる音が聞こえる。ぬるぬるの舌が気持ちいい。

もう体が熱くて、うずうずしてしまって堪らないのに、乳首の周りをすりすり♡ こすこす♡ と優しく指の腹で撫でられるだけで、決定的な刺激が与えられなくてもどかしかった。

「っ♡ んう……♡」

焦らされているようにもどかしくて、腰が勝手にへこへこ♡ と動いてしまう。そしてそのころ、ようやく隼人くんの爪がピンッ♡ と乳首を弾いた。

「ん、む……っ♡」

焦らされていた分刺激の波が大きくて、ビクビクッ♡ と体が揺れる。舌を甘く吸われながら勃起した乳首をくにくに♡ と指で弄られると、おまんこの奥からじゅわ……♡ と愛液が溢れてくるのを感じた。舌を絡めていて声が出せない分を逃すかのように、ふーっ♡ ふーっ♡ と息が漏れていく。

（隼人くんの舌、ぬるぬるしてて気持ちいい……♡ 乳首くくにされたりカリカリされたりするのもすき、すき♡）

勃起した乳首をくくに♡ と摘まれたり、爪でカリカリ♡ と引っかけたり、異なる刺激を両方の乳首に与えられた上に、唾内で絡み合う舌がゆっくりと息を吸うことを許してくれなくて、快感以外なにも考えられなくなる。頭が真っ白になって、どんどん気持ちいいのが昇ってくる。

（あ、どうしよう……♡ 苦しいのに、気持ちいい……乳首だけでイっちゃう……♡）

くちゅくちゅくちゅ♡

くにくに♡ カリカリカリカリ♡

乳首を引っかく手つきが早くなって、それまでくにくにと形を変えられていた乳首をきゅっ♡ と強く摘まれる。

「……んっ……う……♡♡♡」

その瞬間、激しい快楽が訪れて、ビクビクビク♡ と大きく腰が揺れた。それを見た隼人くんの唇がゆっくりと離れると、はっ、はっ、と肩が上下する

ほど浅い呼吸を繰り返す。隼人くんの体にもたれかかるように抱きつくと、隼人くんも少し呼吸が荒くなっているのを感じた。

「キス上手にできたね……かわいい、桃花」

抱きしめたままいい子いい子するようにわたしの頭を優しく撫でる隼人くんに、呼吸を整えながら「……は、やと、くん……」と彼の名前を呼ぶ。隼人くんがそれに答えるように口を開いた。

「じゃあ、今日はもうちょっとがんばろっか」

「え……」

その言葉とともに、隼人くんの指がショーツをずらして、わたしの足の付け根にある一番弱いところ——クリトリスに伸ばされる。

「待っ、だめ、今いったばかり……——あっ♡」

そこはもうすでに存在を主張するように勃起上がっていて、簡単に場所がわかってしまうようだった。いったばかりの体で直接触られるのは刺激が強くて、少し触られるだけでビクッ♡と大きく体が跳ねてしまう。

「ごめんね、刺激強かったね。大丈夫だから、もっと気持ちよくなろうね」

「あ、あ……♡ 待っ……ん……う……♡」

隼人くんの指がおまんこの割れ目からクリトリスまで指を上下させるたびに、ぬちゅぬちゅ♡ と水音が聞こえてきて、自分がどれだけ気持ちよくなっ
てしまっているか思い知らされているようで恥ずかしい。さらに愛液を塗りつ
けるようなその行為をされるたびに、体がびくっ♡ びくっ♡ と震えてどん
どん奥から溢れてきてしまう。

「はあ……桃花のおまんことろ……気持ちよくなってるのかわいい
ね……。これをクリトリスに塗ってしこししたら、もっともっと気持ちよ
くなるからね」

「あ、待って、だめ……♡ あ……それっ、だめえ……っ♡ っ♡」

体に力が入らなくて隼人くんの指を拒否できないでいると、その指が今度は
おちんぼにするようにしこしこ♡ とクリトリスを扱き始めた。強引に気持ち
よくさせるようなその動きに、目の奥がばちばちする。

「うっ……ん……っあ♡ だめ、しこしこ……やあ……♡ あ、あ……っ♡
ふ……っ……♡♡♡」

「いやいやしててかわい……でも桃花のえっちなクリがもつともつとて大きくなつてきちゃつてるよ。いっぱいこしこしてあげようね」

「あぁっ♡だ、め……っ♡んう……う……♡♡」

שישי

ぬちゆぬちゆぬちゆぬちゆぬちゆ♡

愛液を塗りつけてぬるぬるになったクリトリスが隼人くんの指で擦られるたびに、腰が大きく跳ねてしまう。その指がクリトリスの裏筋を擦ると苦しいくらい快感が襲ってきて、その反応を見た隼人くんがそこを強く擦り上げた。

「桃花かわいい……ここ——クリの裏筋が好き？
 いっぱいなどでしてあげ

「ようね」

「ひっ……ちがつ……あ、だめっ♡ そこだめ……いつちゃ……、またいつ……」

[illegible]

ビクビクビクツ♡

頭が真っ白になって、再び強烈な絶頂感が襲ってくる。腰が大きく跳ねたあとも余韻のように体がビクッ♡と波打っていて、止めていた息を押し出すように、はーっ、はーっ、と肩を上下させた。

隼人くんは力が抜けて彼に寄りかかったわたしにちゅう♡とキスをする
と、わたしの膝をそっと抱えてそのままソファーに横たわらせる。それに不思議に思いながらも力が入らないためされるがままになると、隼人くんが横たわったわたしの膝の間に座っていた。

「本当は店だここは触っちゃだめだから、せめて舐めるのは我慢しようかなって思ってたけど……桃花がかわいすぎるから……」

「……………え……………」

「いいよね、桃花」

立てた膝を左右に開かれるとショーツをずらされ、まだいったばかりのおまんこに熱い息がかかる。それになんとなく嫌な予感がして「待って……」となんとか起き上がりとしたけれど、それは生暖かい感触に止められてしまった。

「あ、あ……♡ だめ、はやとく……やあ…っ♡ きたな、から……っ♡
ん……う……♡♡♡♡♡」

「桃花に……汚いところなんて、ん……ないよ……はあ……えっちなにお
い……」

隼人くんの言葉にかあつと顔が熱くなる。着替える前にシートで拭いたとはいえ、きちんとそこを洗ったのは昨日の夜お風呂に入ったのが最後だ。恥ずかしさで腰を引いて拒否しようするけれど、れろ……♡ とクリトリスに舌を這わせられると力が入らなくなつて、容易くソファァーに沈んでしまう。

「ぐっ……う……♡♡♡ あっ♡ だめ、なめ……ないでえ……♡
ひっ……ああっ……♡♡♡♡♡」

「ん……クリ舐めると、力、抜けるね……かわいい……♡」

舌先を固くしてちろちろ♡ とクリトリスを弾くように舐められると腰が痙攣してしまう。何度も絶頂に達した体はまったく言うことを聞いてくれなくて、開かれた太ももを閉じたいのに、ふに……♡ と隼人くんの顔をやんわりと包むだけだった。

ちゅっ♡　ちゅうっ♡　とまるで愛しいものでも扱うみたいにクリトリスにキスを落とした隼人くんは、今度は口でそれを丸ごと包み込んだ。咥内のやわらかな感触に「ぐう……っ」と声が漏れて、ぶるりっ♡　と体が震える。そしてそのまま隼人くんが、ちゅるるる……っ♡　とクリトリスを吸ったことで、強烈な快感が突き上がった。

「ああっ♡　ん、だめっ、それ……っ♡　ぐううっ♡　いっ……っ♡　っ♡」

ビクビクッ♡　ビクビクビクッ♡

腰が大きく跳ねて、今日何度目かの絶頂を迎えてしまう。足がガクガク♡と震えて、肩で荒く呼吸した。

やがて呼吸が落ち着いてくるとともに疲労感が襲ってきて、横になっていたこともあり、それに抗えなくて快感の余韻に浸るようにうっとりとお顔を落としてしまう。

それからぼんやりと意識が浮上すると、わたしの頭の下にはなにか少し硬いものが枕になっていて、体がソファーに横たわっていた。体の上にはなにかが体を覆うように掛けられていて、頭髪を撫でつけるように梳かされている。頭を撫でるその手がとても心地よくて、再び瞼が落ちそうになってしまった。

（気持ちいい……なんだろう、これ……誰かの手、みたいな……）

けれど、それが隼人くんの手で、体に掛けられていたのがスーツのジャケットで、わたしの枕になっているのが隼人くんの膝だということに気がつく、わたしははっとして頭を持ち上げた。ジャケットが落ちてしまわないように手で押さえながら持ち上げた視線の先に、穏やかに微笑む隼人くと目が合う。

「あ、起きた？」

「こ、ごめん……っ。わたし、今、寝て……っ」

「桃花の寝顔かわいかったよ」

言われた言葉を聞いて、恥ずかしいやら申し訳ないやらで顔が熱くなる。どれくらい寝ていたんだろう。仮にも仕事中に。

「こ、ごめんね」

「気にしないで。桃花がかわいすぎて、イかせすぎちゃった」

笑顔の隼人くんには先ほどとは違う意味で顔が熱くなつて、居心地悪く視線を逸らす。そういえばはだけていたはずのベビードールはヌーブラもしっかりとつけられた状態で着ているし、下半身が濡れているような感覚もなかった。

（隼人くんが直してくれたのかな……それはそれで恥ずかしいけど、聞けない……）

とりあえず体に掛けてくれていたジャケットを彼に返すけれど、恥ずかしくて顔は見る事ができなかった。

そんなわたしを不思議に思ったのか、隼人くんがこちらを見る視線に気がついて、慌てて話題を探して口を開く。

「あ、あの、そういえば……お、お店……っ」

「ん？ お店？」

「う、うん。さっき、『任せて』って言ってたけど……」

すぐにはお店を辞められなかったと彼に伝えたときに言われた言葉を思い出して尋ねると、隼人くんは思い出したように「ああ」と頷いた。

「大丈夫。桃花はなんにも気にしないでいいよ。……ちよつとだけ、待たせちゃうかもしれないけど」

隼人くんのその言葉の意味がわかったのは、この日から数日後のことだった。